



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「6月21日は国際ヨガDAY ⑥ 御縁の不思議」

前回「国際ヨガDAYは大魔王が発祥」などという妄想を述べた。

ヴィカース・スワループ元大阪総領事が耳打ちしたのは事実のようだが、それは国連制定をめざす間接的事務的な進言にすぎない。

新宗教のグルが提案したという信者もいる。ならば聞きたい。

「なぜ6月21日にしたの？」

日本の6月は梅雨、前述したようにインドも雨期である。こんなリスクな日をなぜ選んだのか。それにお答え願いたい。

実は新たな異説が浮上してきた。これにはインドヨガ業界の複雑な事情が絡んでいるようである。さらに明らかになれば読者諸氏にお知らせしたい。

日本でもタレントを広告塔に使ったヨガ企業が利権を漁り始めた。

(ああ、嫌だ！嫌だ)

この辺りで心温まる話をしようではないか。そこで国際ヨガDAYの余談を一席。

わが輩の代理でインド国際ヨガDAYに参加した直ちゃんの話はすで述べた。

その直ちゃんから出発前に相談があった。

「大魔王さま、インドで散骨をしたいのですが可能でしょうか」

父上の一週忌を終えたところにインド渡航の話が浮上した。そこで供養の散骨を発願したのである。

ところが、今回の訪問地はデリーからラクナウ (UP州都)、次いで南インドのバンガロール (IT産業の盛んなカルナータカ州都) とマイソール (宮殿の街) である。ガンジス河から遠い。

「デリーで散骨できないでしょうか」

ガンジス河上流の大聖地ハリドワールまでは5時間もかかる。しかしデリーから北100キロの地点にガンジス河の小聖地ガラムクテーシュワルがある。手短に沐浴や供養をしたいデリー近郊の人たちにとっては、利便性のよい聖地である。それでも往復3時間は必要であろう。政府の招待できているので自由な時間はない。

たしかにデリーにはヤムナー河が流れている。だがそれは公害ヘドロの沼である。

わが輩は二十数年前にデリーで散骨をしたことがある。敬愛していた“おじさん”の御遺骨である。彼は神田で家庭的な塾を経営していた。塾生には先生ではなく“おじさん”と呼ばせていた。塾経営のかたわらガンディー関係の機関誌の編集長をしていた。

真っ黒な川面をみたとき驚いた。今だから言えるが、痛く躊躇いの心が生じた。

「デリーはやめたほうがいいよ。直ちゃん」

デリーには高德の尼僧がおられる。その方を訪ねるようにアドバイスした。

突然に尼僧を訪ねた直ちゃんは、二つの良縁に導かれた。そこに偶然やってきたインド人がいた。歴史に残る偉大な人物のひ孫Kさんである。某大企業の社長であったが、あっさり辞めて、南インドから北まで四ヶ月間歩いて巡礼をした。

彼も祖母の遺灰をデリーで散骨をしようと思ったが、余りの汚染に取り止めた。その話を聞いて直ちゃんはデリー散骨を諦めた。

Kさんは最高の聖地ベナレスを選んだ。もう一カ所は、何処だと思ふ。読者諸氏よ。驚くなかれ、富士山である。

Kさんは少年のころ兄妹と来日し、“おじさん”のところで世話になっていた。

たまたま上京していたわが輩はKさんたちを神楽坂の祭に案内したことがある。

それに先立つこと、わが輩が最初にインドに渡った時、K氏の祖母への紹介状を携えていた。それでアーシュラム（共同体）に滞在することができた。

“おじさん”を中心にKさんと祖母、そしてわが輩が連なり、それに直ちゃんが加わった。

ところで直ちゃんは「さて、どうしたものか」と思案したが、これも偶然に次の日サルナート（ブッダが最初に説法した聖地）から尼僧が来訪するという。その方に託してベナレスで供養散骨することに決まった。（なんて幸運なのだろうか）

わが輩が国際ヨガDAYで奔走しているとき、YDさんからメールが届いた。夫婦でスリランカに行きたいとのことであった。彼は“おじさん”の塾生で、25年前に一緒に行ったことがある。

YD夫妻とわが輩は偶然にも2011年7月ヒマラヤ修行団で一緒になり親しくなった。彼の名は知っていたが初対面であった。

“おじさん”は塾経営をYDさんに委譲したいと思ったことがある。それほど彼への信頼は厚かった。それに応えるかの如く、彼の“おじさん”への敬慕には篤いものがある。

さて、何日に出発するか。体調がすぐれないのでなかなか決まらなかった。8月20日に出発することになったが、一つリクエストがあった。

コロンボ南部のモラツアにぜひ立ち寄りたい。それを日程の中に入れてほしい、との要望であった。“おじさん”は在家ながら、そこにストゥーパ(仏塔)を建立していた。

帰国するなり成田空港から電話があった。随喜の興奮で満ちていた。

「私たちが仏舎利塔に参詣した26日は、“おじさん”の命日でした！」

もちろん、わが輩もYD夫妻もその日が命日だと知らなかった。

これは全くの偶然である。

これを神秘や霊魂的な事象だと、わが輩は言わない。もう一つ功德があった。YDさんの数値が3ポイント上がった。これには医者も驚いた。

しかし、面白いじゃないか、読者諸氏よ。このような良縁があるから生きている楽しみがある、と思わないかい。

来年には読者諸氏にも良縁が訪れること確かである。なぜなら、読者諸氏はすでにわが良縁のエッセイを読んでいるからである。